

神話設定から見る賈宝玉の両性具有

高 箭

はじめに

『紅樓夢』の主人公、賈宝玉は中国の古典文学の中において、大いに異彩を放つ人物である。彼の特異性に関して、これまでも様々な研究が行われてきた。例えば、社会性の欠如という角度から、「余った人」と呼ばれたり、伝統秩序への反抗性から「反逆児」と捉えられたり、女性的な特徴が明らかなことで「生理上の男、心理上の女」と読まれたりしてきた。これらの研究では一定の角度から賈宝玉の特異性を把握したものの、彼の潜在的矛盾、性格の二面性、例えば、反逆性と服従性、気丈と軟弱、理性と感性、そういった対立したものに関して、統一的な視点が欠けているように思われる。

近年、賈宝玉の内面にある女性性に注目し、彼のジェンダー・アイデンティティーを取り上げるような研究が多くなってきた。そのなかで、賈宝玉の矛盾に満ちた性格を、男性性と女性性との混合、そしてその相互転化として捉える、「両性具有」という概念による見解は、斬新で啓示的である。

ユングの仮説によれば、人間の本質は男性性と女性性を備える両性具有であるが、発達上のある時期に、ホルモンといった肉体的要因やジェンダーといった社会的な要因によって、人は男か女か、どちらかの性を強制される。そして、理想的な両性具有像は、ユング派心理学者J・シンガーの言うように、「個人の内面の男性性と女性性が調和しあった人格」¹である。

王富鵬は、賈宝玉の特異性を「両性具有」と見なすべきだと主張する。彼によれば、賈宝玉の男性性は、反逆性、原則性、理性、強い信念、自由心などであり、その女性性は、愛情深さ、物事の変化への敏感性、感傷性などに現れる。両性具有の実質を、「男性性と女性性との相互融合及び統一」²とし、彼の理想性を称えた。

一方、王富鵬の統一論と反対に、寥咸浩は、男性性と女性性の対立から、賈宝玉の両性具有を論じる。賈宝玉の成長への拒否、消極的な態度を「女性性」

とみなし、「女性性」/「男性性」の対立を、「未成年」/「成年」という図式から見出す。そして、賈宝玉の両性具有を「女性性に偏執する」ことに特徴づける。³

精神上の男/女の統合体を意味する両性具有による分析は、賈宝玉の特異性を彼の内面に存在する男性性と女性性との関係として捉えることで、これまでの、彼と女性との関係といった対他関係から、一種の対自関係に転換したのである。これは、賈宝玉の内面世界の重層性を理解するには有力な方法であると考えられる。

一方、賈宝玉の性格には、成長につれて次第に形成される面もあるが、しかし、彼がまだ七、八歳の時に、すでに、女は水でできて、男は泥でできて、女を見るとすっきりするが、男を見ると濁臭を感じると、周囲を驚かせるような発言をしたことを考えると、彼の特異性はもっと早い段階から備えられていたことが分かる。李辰冬は、「賈宝玉は生まれつきの哲学者であり、自分の人生観を持って生まれたのである」⁴と述べ、賈宝玉が特異性を持って生まれたことを示唆した。

周知のとおり、賈宝玉は前世のある人物として設定されている。そもそも、仏教的な輪廻転生をモチーフにし、主人公を来歴のある人物に仕上げるのは中国古典文学においてよく見られることである。例えば、『水滸伝』における豪傑の百八人はみな天上にある星宿(星座)の転生であり、『西遊記』における孫悟空は、石から生まれ変わった猿であった。『紅樓夢』においても、金陵十二釵らはみな太虚幻境の仙女の転生である。しかし、この賈宝玉に限っては、二つの前世を持っている。その二つの前世は、それぞれ、二つの出生神話から来るものである。そこで、その二つの出生神話が、どのような象徴的な意味を持つのかについては、賈宝玉の特異性を両性具有として考察する上で、極めて重要な意義があると考えられる。

本論では、賈宝玉の来歴、即ち二つの出生神話に焦点を当て、それぞれの象徴的な意味を解明し、そして、その関連性から、賈宝玉の両性具有性を見てゆきたい。

1. 二つの神話設定

賈宝玉は口に玉を含んで生まれたのである。賈宝玉とその玉はそれぞれ、二つの神話から来るものである。一つは、開篇のところに書かれた女媧補天とい

う神話であり、もう一つは、甄士隱の夢を借りて引き出される太虚幻境という神話である。まずは、それぞれの粗筋を紹介する。

1.1 女媧補天

神話時代に、女媧は天の破れをつくろうため、三万六千五百一個の石を鍛えあげた。結局彼女は、三万六千五百だけ使って、たったの一個を使いあまし、それを大荒山の青后峰というところに捨てた。余ったこの石は、鍛錬を受けて智慧だけは一人前につき、他の石が天を繕うことに役に立てたのに、自分だけは能無しで選に外れたと悲嘆し屈辱を感じていた。ある日、通りかかってきた僧（ボウボウ茫茫大師）と道士（ミョウミョウ渺渺真人）が休憩しながら語る浮世の栄華富貴の話を耳にし、この石は煩惱をかきたてられ、人間の言葉を操って両名に向かって下界を志願する。それに応じた僧と道士は、石を幻術で掌中に納まるほどの透き通った美玉に変身させ、その体に文句などを彫り付けてやって、「通靈玉」と名づけた。

後に僧と道士は「通靈玉」を警幻仙姑に託し、神瑛侍者が下界に転生する際に、その口の中に加えその下界行を果たさせた。「通靈玉」は人の世の離合悲嘆を一通り味わったあと、僧と道士に携えられ青后峰のもとに返り、荒石の相に戻された。下界で「通靈玉」が体験した人生遍歴が荒石に戻った体に刻まれ、そして、『紅樓夢』の物語となる。

1.2 太虚幻境

有名な女媧補天の神話と異なり、「古今未聞の珍談」⁵とする太虚幻境という神話は、作者の独自の創意であると思われる。

太虚幻境とは、警幻仙姑を始めとする仙女ばかり住んでいる天上の国である。その中の赤瑕宮に住んでいる神瑛侍者という仙童が、靈河のほとりの三生石に生えた絳珠草という仙草を愛し、毎日甘露を注いでやっていた。ところがあるとき、「なんのはずみか」（第一回）神瑛侍者は下界の人間界に降りたいと警幻仙姑に申し出、その許可を得た。甘露を受けた絳珠草が、やがて草の形を脱して女の姿をとるに至り、絳珠仙女となった。一生の間に流せる限りの涙を持って、神瑛侍者の甘露の恩に報いようと、警幻仙姑にお願いして彼のあとを追って下界に下りた。

のちに神瑛侍者は、開国の元勳の末裔である都長安の大貴族賈家の若君

賈宝玉に生まれ変わり、絳珠仙女は彼の従姉妹、林黛玉に生まれ変わった。彼らのあとを追って他の仙女も続々と下界に降りて、「金陵十二釵」に生まれ変わり、賈家に集まった。

2. 二つの前世

以上の二つの神話設定から見れば、賈宝玉の前世は、「太虚幻境」の神瑛侍者であり、彼が持って生まれた玉の前世は、「女媧補天」の余った石である。しかし、その石は賈宝玉のただの生まれついた付随品ではなく、賈宝玉その人の前世と見られることもある。脂硯齋の評語には、賈宝玉を「石兄」と呼ぶ例が多くあり、賈宝玉と林黛玉の因縁が「木石因縁」と呼ばれるのも、彼が石であったためである。沈治鈞は、賈宝玉の前世が石でもあり神瑛侍者でもあることは、『風月宝鑑』と『石頭記』という旧稿にあった石の神話が消されずに、新稿『金陵十二釵』にさらに神瑛侍者の神話が加えられたためである、と述べた。⁶

『紅樓夢』が五回にわたって改稿され、未完成のままに作者が死去したため、版本に矛盾した点や不合理な点が数多く残った。しかし、二つの前世があることは、単純に版本の違いだけではない。その象徴的な意味から見れば、二つの前世は、賈宝玉にとっては欠かせない一つの全体である。

2.1 石 玉の象徴的意味

「女媧補天」に余った石が持つ象徴的な意味は二つの面から見ることができる。

まず、石は中国で最も知られている「女媧補天」という神話から来るものである。この神話は『史記・三皇本記』、『楚辞・天問』、『淮南子・覽冥訓』などの古書に記載されており、記述が若干違うにしても、女媧氏が五彩の石を練って天の破れを補い、九州（中国全土）を救った筋が共通である。それ以来、中国では、「補天」という言葉は天下を治め、民衆を救うことを意味するようになる。それは、一般的に、男性の責任、役割として決められている。そして、「補天」は、「修身、齐家、治国、平天下」（身を修め、家を斉え、国を治め、天下平らかなり）（『大学』）という儒教倫理の最終的な目標として、中国の士大夫の理想となる。「以天下为己任」（世の中に役に立つことを自分の責任にする）、「天下興亡、匹夫有責」（天下の興亡は、一人一人責任ある）といった言葉があるように、「補天」という使命感は、「天下」への責任感、言い換えれば、長い

間、男性のアイデンティティーの核心となる。

このような「補天」という大義を背景にし、作者は独自の意図で一つの余った石を作り上げた。その石は、天を補うために鍛錬されて準備をしたにも関わらず、使い余しとして女媧に捨てられることに、悲嘆し屈辱を感じざるを得ない。この悲嘆、屈辱は、天を補うことのできない、言い換えれば、男としての役割を果たせない悔しい気持ちである。「無才可去補蒼天(天をつくろう才もなき身)(第一回)」とされる石は、まさにこの悔みを抱きながら、自分の役割を果たすために下界したのである。

次は、石がその姿のままで下界したのではなく、美しい玉に変身された後に下界した設定も意味深い。作品では、「ぶさいく」な石に、「珍品」にみえるような格好をつけさせなければ、人間界に入っても大事に扱われないという理由で、僧と道士によって変身させたと説明しているが、しかし、その変身過程は、ただ形だけが美しくなり、あるいは、賈宝玉の美少年をイメージしただけではなく、実は、もう一つの重要なメタファーを隠しているのである。

『紅樓夢』では、同音異義語で名前にほかの意を寓するという手法がよく指摘されている。例えば、賈家の四人の娘、元・迎・探・惜の四春という名前には、同音の「原宥嘆息」(もともと嘆息すべし)の意を寓され、女性の運命に深く同情する作者の意図がうかがえる。それで、石が他の宝石ではなく、「玉」だけに変身したことにも作者の深い意図が託されていると考えられる。王国維は、一番早く「玉」が「欲」と同音だと指摘した。そして、その「欲」が「人生の欲を代表する」と認識した。しかし、「補天」の志を遂げない石の悔みを考えれば、その「欲」を「補天」への「欲」、つまり、立身出世への「欲」として理解してもよい。

以上二つの面から見れば、石 玉は、補天に示される立身出世への男性的な「欲」を象徴している。

2.2 神瑛侍者の象徴的意味

神瑛侍者は太虚幻境の住人である。その太虚幻境のありさまは、第五回、賈宝玉が夢の中で太虚幻境を遊歴した際、具体的に呈示された。そこは、女媧補天の大荒山の「悲しくもの寂しい明け暮れ」(第一回)と全く違い、「あたりは朱塗の欄干に白い石、緑の木々に清げな谷川、いかにも人跡まれな浮世ばなれのした」場所であり、中に「荷袂はひらひらと、羽衣はふうわりと、あでやか

なるは春の花、なまめかしきは秋の月……」というような、綺麗な仙女ばかりいる仙境である。そして、太虚幻境には、「痴情司」、「結怨司」、「朝啼司」、「春感司」、「秋悲司」、「薄命司」などの建物があり、天下のあらゆる女子の過去・未来のことを記した帳簿が保管されている。その管理者である警幻仙姑の役目は、「人の世の色恋の貸し借り」や「浮世の男女の仲」(第五回)を司ることである。

この仙境はいったい何を象徴しているのか、太虚幻境の投影である大観園を合わせて考えれば、「女兒之心、女兒之境」(女の子の心、女の子の境界)という脂硯齋の評語が最も中している。神瑛侍者を始め、絳珠仙女及び多くの仙女が下界で集まった場所　大観園は、賈宝玉一人の男を除き全員女性が暮らす樂園である。その樂園における暮らしに展示されるように、「女兒之心」とは、自由、平等、友愛、純粹、清潔などである。そして、「女兒之境」は、「女兒国」を思わせるような、女と女の関係のみによって築かれる世界である。女同士の関係は、儒教に決められる人間関係の基本である「五倫」(「父子、君臣、夫婦、長幼、朋友」)に入っておらず、その核心となるものは、「五倫の道」(「親・義・別・序・信」)とも異なり、「愛情」である。張錦池の言うように、太虚幻境は、「四海之内、皆兄弟なり」(『論語・顔淵』)と反対に、「四海之内、皆姉妹なり」という作者の独特な理想を託される、平等、自由、平和、愛情に溢れる世界である。⁷

この愛情に満ちた世界にいる神瑛侍者は、まさに愛の化身である。人間でもない草にまで愛情を注いで、毎日甘露を注いだのである。彼のおかげで、絳珠草が「始めて長の歲月、その命を延ばせ」た上に、「天地の精氣を受けて」草木の姿を脱して人間となった。脂硯齋の評語から、作者が最終回に構想した「情榜」に、賈宝玉を「情不情」(情のないものにも情を持つ)と、林黛玉を「情情」(情のあるものにしか情を持たない)と評したのが分かる。賈宝玉の「情不情」は、「不情」のもの、つまり、人間でも草木でも、あらゆる生命体に、「情」を持つと解釈されている。

2.3 二つの前世の関係

大河小説である『紅樓夢』の枠組みは、「女媧補天」と「太虚幻境」との二つの神話設定によって堅固に構築されている。そのため、この二つの神話の関係について、それぞれ構造上の役割や意義を論じる研究が多く行われてきた。しかし、この二つの神話の関係を象徴的な意味から見れば、それらが意味の全く

相反した神話であることが分かる。

「女媧補天」は、補天に象徴される立身出世という男性の理想を語る神話であり、「太虚幻境」は、女性の運命に同情し、女同士の絆を提起し、そして生命体に対する愛情の力を示した神話である。女媧は女性の神とされるものの、鍛錬した石を余っただけの理由で捨てて使わないという点において、権力者として振舞う男性のようでもある。しかし神瑛侍者が気まぐれで下界するには、警幻仙姑に申し出るだけでいい。女媧と石の関係は、上下関係であり、権威と秩序を象徴している。警幻仙姑はただ太虚幻境の管理者であり、神瑛侍者とは、自由で平等な関係である。大荒山の荒涼と孤独は、理想を達成する過程における情の欠如を象徴するのと対照的に、太虚仙境の優雅と平和は、情に満ちる女の楽園を象徴する。

したがって、賈宝玉の二つの前世となる石と神瑛侍者は、各自の神話から、全く相反した意が寓されている。石は、達成と秩序を核心とする男性性の価値観を表明し、神瑛侍者は、愛情と親和を中心に女性性の価値観を具現するのである。

ここでは、なぜ賈宝玉に二つの前世があるのか、なぜ賈宝玉は石であると同時に、神瑛侍者でもあるのか、その理由が明らかになったと思う。それは、石が賈宝玉の男性性を象徴し、神瑛侍者が彼の女性性を象徴するため、両方とも、賈宝玉にとって欠かせない存在だからである。「古今未曾有」とされる賈宝玉は、まさに、この二つの前世によって、男性性と女性性を持ち合わせる両性具有者として、異彩を放つのである。

3 賈宝玉の両性具有

口中に五色の透き通った美しい玉をくわえた賈宝玉の誕生は、「なんともはや珍しいこと」(第二回)として、みんなを驚かせた。その美しい玉に因んで宝玉と名づけられた賈宝玉は、実際もその名の如く、人目を引くような美少年である。彼の初登場は、下記のように描かれている。

「その面は中秋の月の如く、色は春の暁の花の如く、・・・、頬は桃の花びらの如く、瞳は秋波の如し。怒れるときも笑うかの如く、眼を怒らし視るときも風情あり。」(第三回 p. 34)

といったような美女にも思わせる美貌は、俗っぽい賈家の男性の中で、ひと

きわ目立っている。「男女の別」を重んじる当時の風習では、親戚同士でも「男女七歳不同席」(男女七歳にして席を同じうせず)とし、男女を厳しく区別し別々に育てるのが一般的である。しかし、賈宝玉は、一家の頂点に立つ祖母の賈母に「眼の中へ入れても痛くないほど」(第二回)可愛がられたため、小さい頃から、「他の人と違って……姉妹たちと一つ所で甘やかされて育った」(第三回)のである。のちに、娘たちの住む大観園には、王妃である姉の賈元春の特別な配慮によって、彼も入園した。

大観園は、賈元春の帰省を機に営造された、この世に珍しく美しい庭園である。そこは、娘たちが、琴を弾いたり碁をかこんだり、絵を描いたり刺繍をしたりするところであり、賈宝玉を除けば、完全に女性の世界である。

「園内の住人の大部分が若い娘たちのこととて、自他の区別もろくにつかぬ天真爛漫の年頃だけに、坐臥にも彼(賈宝玉)を避けたりせず、キャッキャ笑いあうのも無邪気そのもの……」(第二十三回 p. 249)

と描かれたように、賈宝玉一人の男性がいるにも関わらず、娘たちが特に警戒せず、ありのままに暮らしている。これに関して、宋淇はこのように述べた。

「大観園の中で、彼(賈宝玉)は多くの姉妹たち、侍女らを相手にし、少しもなれなれしくなく、まるで同性知己に対する自然な態度で、憐れみをかけたり、同情したり、思いやったりする。だから、みんな(彼女ら)も彼に警戒しないのだ。」⁸

宋淇の言うように、大観園の中では、賈宝玉が女性のように振る舞い、女性らとの関係は、女性同士のようにである。

しかし、賈家の貴公子として、彼は常に大観園にいられるわけではない。男の子だけを通わせる家塾に通い、薛蟠などの従兄弟たちと付き合い、お酒やお芝居の宴を騒ぐなど、大観園を一步出れば、彼はまた男としての振る舞いもするのである。

ここからみれば、賈宝玉は特例として、大観園の世界と大観園以外の世界を自由に往来することができる。余英時は、彼の有名な「二つの世界」論において、大観園をユートピアとし、大観園以外の世界を現実的な世界とみなす。そして、「清」と「濁」、「情」と「淫」、「真」と「偽」などの二項対立の概念を導入し、賈宝玉を「情と淫を備え、清と濁を兼ねる」とみなし、彼が理想世界

と現実世界との二つの世界での唯一の接点であると論じた。⁹

余英時の「二つの世界」論に、「男」と「女」との対立した概念を導入して見れば、大觀園を女性の世界とみなし、それ以外の世界を男性の世界と見なすこともできると考えられる。そうすれば、この二つの世界を往来し、その接点となる賈宝玉が、まさに男性性と女性性を持ち合わせた両性具有者とみなすことは、可能である。

3.1 女性性への憧れ

両性具有者と設定されており、両世界を自由に往来することのできる賈宝玉は、王富鵬が分析したように、反逆性や理性などの男性的な気質と愛情深さや感性などの女性的な気質を併せ持つ。しかし、これだけで、彼を、両性具有の理想像である「男性性と女性性が調和しあった人格」と見なすのは、疑問である。

まず、彼の思想を代表する有名な発言から見てみよう。

女の子はみな水でできた身体、男はどれも泥でできた身体。女の子になら会っただけで私は気が晴れ晴れする。なのに男に会うと臭くて胸がむかつくのだ。（第二回 p. 27）

天は人間を万物の靈長となされたが、およそ山川日月の精秀は女の子にのみ集中してしまい、むくつけき男（鬚眉男子）など、その残りかす、濁ったあぶくも同然。（第二十回 p. 67）

以上の発言に示されたように、彼は極端な男性憎悪や女性賛美を行っている。ただ、彼は男性を全て嫌い、女性を全て好きなわけではない。実際に、秦鐘や柳湘漣などの男性は好きで、老婆や俗っぽい女は嫌い。ゆえに、彼の所謂、男性憎悪、女性賛美は、男性に代表される気質や価値観を憎悪し、女性に代表される気質や価値観を賛美すると言ったほうが的確であると思われる。

当時の社会において、男性に代表される価値観は、立身出世である。その立身出世の具体的な表現形式は、官吏になることである。官吏になるには、科挙を通らなければならない。科挙で勝とうとするには、四書・五経、八股文を習わなければならない。賈宝玉が一番嫌いなのは、まぎれもなくこの八股文である。そして、彼は官僚同士の往来、堅苦しい儒教文化を極端に軽蔑し、官僚を「国賊禄鬼」（国賊・禄盗人）、武士や文人の「死節」（名節のために死ぬ）を、

「不知大義」(名声を博するために、大義を心得ぬ)(第三十六回)だと罵倒した。

反対に、賈宝玉は女性的な美に憧れている。彼自身は女性のように化粧をしないものの、女性に劣らず立派な化粧道具を持っており、白粉や紅を弄び、赤いものを愛好する「愛紅」という癖もある。そして、なによりも、立身出世を目指し、功名富貴を求める男性的な価値観と全く正反対の、無功利性、純粹、清浄無垢、愛情などといった女性性が、彼にとって、永遠に追求すべきものである。

彼の理想は、大觀園の中で、毎日を姉妹たちや侍女と一緒に、絵を描いたり詩を作ったり、書物を読んだり手習いをしたりして過ごせることである。その後、

「わたしは姉妹のみなさんとともに過ごせるその日その日が生き甲斐、死んでしまったらそれまでですからね、将来のことだのなんだのと、なに構うものですか。」(第七十一回、p. 496)

と、姉妹たちと一緒に過ごせれば、もうこの上なにも欲しくなく満足しきる。

以上からみれば、賈宝玉の両性具有の実質は、王富鵬の「男性性と女性性との相互融合及び統一」というより、「女性性へ偏執する」という寥咸浩の論説が的確と思われる。

3.2 「通靈玉」と賈宝玉

賈宝玉が男性性に憎悪、女性性に偏執することは、実は、彼と「通靈玉」の関係によって象徴されている。

「通靈玉」と賈宝玉との関係に関して、張錦池は、「通靈玉」が主人公の賈宝玉に幸運をもたらすと同時に災難にも遭わせる、と述べた。¹⁰張の言う通りに、馬道婆に呪われた賈宝玉を意識不明な重態から救ったのもこの「通靈玉」であり、一旦失うと、彼を失神まで追い込ませるのもこの「通靈玉」である。幸運にせよ災難にせよ、とにかく「通靈玉」は賈宝玉にとって無くてはならぬものである。しかし、「通靈玉」がなぜ、賈宝玉にとってそれほど影響力を及ぼすかについて、張は具体的に追求していない。

その理由を、賈宝玉の二つの前世を考察した結果から見れば、合点がいく。要するに、石「通靈玉」が賈宝玉の男性性を象徴する存在であるため、「通靈玉」

と賈宝玉が二つに見えるものの、実際は、一つであるのだ。作者が二つの前世を作る意図は、賈宝玉を女性性と男性性を併せ持つ両性具有者と創造するところにある。言い換えれば、賈宝玉がその「通靈玉」と真に一体になったときこそ、始めて完全な人格となるのである。

しかしながら、「通靈玉」が賈宝玉の体外にあることに暗示されるように、彼はその男性性を内面化していないのである。内面化していないばかりか、むしろ排除しようとする。それは、彼の「通靈玉」に対する態度によって象徴されている。

五彩で奇妙な「通靈玉」は、賈宝玉の口に含まれこの世に登場した時点から、彼の「命の綱」と一家に大事に扱われているにもかかわらず、賈宝玉だけに嫌われ、何回も叩きつけられた。

例えば、第三回に、初対面の林黛玉がほかの姉妹たちと同じく、「通靈玉」を持っていないと知ったとたん、彼は急に発狂して、力いっぱい通靈玉を叩きつけた。その理由は、仙女のような林黛玉も、家の姉妹たち誰一人も持っていないのに、自分だけ持っていてつまらないからである。

この行動に対して、詹丹は下記のように解釈した。

「(賈宝玉)のような考え方は、完全に女性的な価値観、標準を自分の標準とし、女性が持っていないものなら、自分も当然持っているわけにはいかないのである」¹¹

詹の説明は適切ではあるが、不十分である。「通靈玉」の象徴的な意味から見れば、賈宝玉が「通靈玉」を叩きつける行動は、まさに、彼が自分のうちにある男性性を排除しようとする意識を象徴していると考えべきである。

4 おわりに

以上の考察から見れば、賈宝玉の二つの前世は、それぞれ彼の男性性と女性性を象徴し、両方とも、彼にとって欠かせない存在である。賈宝玉の特異性を、まさにこの二つの前世によって、男性性と女性性を持ち合わせた両性具有者としての視点から見たほうが的確だと考える。

一方、賈宝玉が男として、自分の内なる女性性に忠実で、女性的な価値を認め、追求することは、当時の男尊女卑の社会において、異色であり、評価すべきところであるが、しかしながら、「通靈玉」と彼の関係に象徴されているよう

に、彼は最終的にその女性性だけに親和し、男性性を排除しようとするのである。そういう意味では、賈宝玉は「男性性と女性性の調和しあう」両性具有の理想像とは一步離れたと言わざるを得ない。

注

- 1 ジュ・ン・シンガ - 『男女両性具有：性意識の新しい理論を求めて』藤瀬恭子訳 人文書院 1981
- 2 王富鵬 (1999) 「一種の特殊な性格 賈宝玉の両性化性格の特徴を論じる」『紅樓夢学刊』1999.2
- 3 廖咸浩 (1986) 「両性具有の夢 『紅樓夢』と「荒野の狼」の中の両性具有という象徴の運用」中外文学、1986、9 (第15巻、第四期)
- 4 李辰冬 (1935) 「紅樓夢重要人物の分析」『紅樓夢研究稀見資料汇篇』呂啓祥、林東海 主編 人民文学出版社 2001.811
- 5 第一回。本稿で使うテキストの引用は、平凡社版 1973 年に出版される、伊藤漱平が翻訳した『紅樓夢』によるもの。
- 6 沈治鈞 (2002) 「石頭・神瑛侍者・賈宝玉」『紅樓夢学刊』2002.3 p. 130 参照
- 7 張錦池 (1997) 「論紅樓夢的三世生命説与兩種声音」『紅樓夢学刊』1997 増刊 p.200 参照
- 8 宋淇 (1970) 『紅樓夢識要 宋淇紅学論集』p. 60 中国書店 2000.12
- 9 余英時 (1973) 『紅樓夢的兩個世界』p. 36 参照 上海社会科学院出版社 2002.2
- 10 同注 6 p. 181 を参照
- 11 詹丹 (2003) 『紅樓夢与中国古代小説研究』p. 23 東華大学出版社 2003.9